

[008] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10288>

出版情報：語文研究. 8, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

○ ようやくにして第八号の編集を終る所までこぎつけた。本号に対する御寄稿が余りに少なかったことは、何といつても痛手であつて、勿論編集当事者の怠慢の然らしむるものとはいへ、いつまでも締切のふんざりがつかず、かなりの難産であつたことを卒直に申し上げる。

○ 然し、研究論文三篇はいずれも力作ぞろいであり、特に横山正氏からは種々御助言を頂いた上、早速の御送稿があり、感謝に堪えない。更に書評四篇の多きを得たことは、はからずも本号の特色となつたわけであるが、中三篇はわが国文学会ゆかりの故杉浦正一郎教授、及び笹淵友一、目加田さくを両氏それらの御労作に關するものであり、また望東全集は穴山孝道教授の御尽力によるものと聞いているから、まことに

意義深く有難い。御多忙中、執筆下さつた方々に御礼申し上げます。

卷末の細川文庫目録は長い間懸案のものであつたが、中村幸彦教授の御指導により、二三の有志が相寄つて作成した。暑中休暇とはいへ、図書館改修工事に前後して忽々の間にとりまとめたもの故、猶、再三の調査、後考にまつべき節が少くないが、とりあえず一覧に供する次第であつて、研究上何等かの御参考になるを得ば幸甚である。記述上の不統一は偏に本誌編集者側の責任である。

○ 従来、何となく素人臭く、垢抜けがしないという御批評をしばしば頂いていたので、本号から本文の活字を八ポに切り換えて見た。その他の御要望にもなるべく沿うよう努力してはいるが、猶、御不満もさぞかしと考へる。どうか腹藏なくお聞かせ願いたい。校正にも研究室の総力で鋭意つとめているが、やはりわかり切つた誤植など

が後になって目につくといった場合もあつて、御寄稿の方々に少なからぬ御迷惑をお掛けしている始末、お氣付きの点は遠慮なく御指示下さる様願ひ上げる。次号から空欄を利用して、正誤表を掲げたく思う。

○ 前号以来正に一年、今年も又暮れようとしてゐる。本年は第二講座にあらたに天理大学から御赴任の中村教授を迎え、第一講座の福田教授と相並んで新体制を整えた。天も幸ひして氣候温和、台風の襲来もなく、豊年の秋を迎え得た。われらの学問も大きく実つて然るべきものと思う。各位のよき御迎春と御活躍を祈念して筆をおく
(一九五八・一一・二〇・春日記)

次号原稿締切

四月三十日迄

四百字詰原稿用紙二十枚以内